［Ⅱ　中等教育研究］

名古屋大学教育学部附属中・高等学校における「併設型中高一貫教育」の現状と課題

斉　藤　真　子*

1．名古屋大学教育学部附属中・高等学校の教育目標と概要
2．併設型中高六ヵ年一貫カリキュラムの特色と学校像
3．併設型中高一貫カリキュラムの内容について
(1)「総合的な学習の時間（総合人間科）」（中学１年生～高校３年生まで）
(2)　ヒューマンプログラム「ソーシャルライフ」（中学１・２年生 と高校１年生）
(3)「選択プロジェクト」について　（中学２・３年生）
(4)「新教科群」について　（高校１・２年生）
(5)　大学との連携によるさまざまな取り組み
4．併設型中高一貫カリキュラムについての評価
(1)　青年期の「キャリア」形成に資する「総合人間科」とヒューマンプログラム
(2)　中高の選択（「選択プロジェクト」と「４つの新教科群」）の違いと教科の再編への発展
5．大学との連携をいかした「中等教育の新しいあり方」へ

1．名古屋大学教育学部附属中・高等学校の教育目標と概要

教育目標は、心豊かにして主体性のある人間形成を企図し、総合的に事物を把握し創造的に活動し得る態度と能力を養うことである。

中学校各学年２クラス・高等学校各学年３クラス。全日制課程普通科の男女共学校である。高等学校は、２クラスの生徒数を附属中学校から、約１クラスの生徒数を本学教育学部附属中学校以外から入学時に募集する。中高15クラス。全校約600名。施設は名古屋大学キャンパス内にある。平成12年度より併設型中高一貫校として発足。

同時に『「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」－総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発－』のテーマで、平成12年～14年の文部科学省の研究開発に取り組む。

＊教育学部附属中・高等学校教諭

2．併設型中高六ヵ年一貫カリキュラムの特色と学校像

校の併設型中高六ヵ年一貫カリキュラムの特色の一つ目は、「個性的自立」による「中高六ヵ年の発達段階区分」である。これは、六ヵ年を「入門基礎期－個性探求期－専門基礎期－個性伸長期」に４区分し、前期課程３年（中学）を１－２、後期課程３年（高校）を２－１に区分したものである。個性の発達の面から中高六ヵ年一貫を試みるものである。

この「１－２－２－１制」を基に、教科の学習、総合的な学習、学習方法，自治能力、人間の在り方などの中高六ヵ年一貫教育の構造化がなされた。

特色の二つ目は、併設型の特徴である高校からの外部入学生を、中高六ヵ年一貫カリキュラムの中に積極的に位置付けていることである。高校からの外部入学生（約１クラスの生徒）を「新しい個性」としてとらえるとともに、附属中学校からの内部入学生とともに「個性を磨きあう」ことができるとして、融合カリキュラムの展開に構造化した。

さて、本校の「併設型中高一貫カリキュラム」の、中高六ヵ年を貫いている二本の柱は「総合的な学習（総合人間科）」と「ヒューマンプログラム（ソーシャルライフ）」である。

そして「個性探求期」（中２・３）には、選択教科である「選択プロジェクト」をおき、「専門基礎期」（高１・２）には「新教科群」を位置づけている。

寸胴型（２－２－２制）の中高一貫校である中等学校（東大附属・奈良女子大附属）とは異なる特色を持つ併設型中高一貫校である本校は、総合大学である名古屋大学との連携をより深めて「新しい中等教育の創造」を、今後の学校像として構想している。

3．併設型中高一貫カリキュラムの内容について

(1)「総合的な学習の時間（総合人間科）」（中学１年生～高校３年生まで）

中学では2002年度より、高校では2003年度より、実施される「総合的な学習の時間（総合人間科）」を本校では平成７年度（1995年度）より文部科学省の研究指定を受け全国に先駆けて実施している。６年間あるいは３年間の総合人間科の学習を通して、自主的に学ぶ力を身につけ、自分探しと生きがいの探求をめざす学習である。各学年とも教室を飛び出して地域や名古屋大学のさまざまな施設や研究室の専門家から直接学ぶフィールドワークがある。

また各学年に学年テーマが設定されているが、自分自身のテーマは自分で考え見つけることができる。この学習には教科書がない。学習内容と学習方法をきめるのは自分自身である。

【学年テーマ】

中学一年	生き方を探るⅠ	高校一年	生命と環境Ⅱ
中学二年	生命と環境Ⅰ	高校二年	平和と国際理解Ⅱ
中学三年	平和と国際理解Ⅰ	高校三年	生き方を探るⅡ

※中・高で同じ学年テーマを繰り返す。　※中１と高３に「生き方」をおく。

【高校「総合人間科」の活動展開例】　（生徒自らが学ぶ場）

各学年にフィールドワークをおき、特別活動及び学校行事と一体化して実施する。

高校１年　生命と環境Ⅱ

林間学校を利用した総合学習への動機づけ／夏休みを利用した体験的活動（ボランティア・看護・福祉）／11月個人テーマに基づき丸一日のフィールドワークで地域、大学に出かけて学ぶ　発表会　研究論文執筆　個人研究

高校２年　平和を学ぶⅡ（国際理解・人権・平和）

沖縄研究旅行（３泊４日）を「総合」のフィールドとして生徒によるテーマ授業を実施。11月現地の人を訪問しフィールドワーク。沖縄戦・基地問題・歴史・文化・教育・民族・女性などのテーマをグループで研究。「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」などのテーマでディベート・ディスカッション。研究集録。報告会。　グループ研究

高校３年　生き方を探るⅡ

大学の研究者、社会人を学校に招いての進路別懇談会　大学・研究室訪問　職場訪問　オープンキャンパス参加　分科会での生き方スピーチ・ディスカッション　自分史の見直し　社会と生き方につながる進路選択

ａフィールドワークの訪問先への連絡（アポ取り）は自分で

フィールドワークの訪問先への連絡（アポ取り）には電話帳がたよりである。研究目的と調べたいことを説明して訪問の許可を得ても日程が合わなかったりする。電話をかけてすぐにフィールドワーク先が決まることは少ない。そのような時には「スクールボランティア（名古屋大学の研究室と保護者の方のボランティア）」制度を活用する。何度も連絡してやっと訪問先が確定したときの喜びは大きい。一日のフィールドワークでは、午前と午後の２箇所の訪問先が必要となる。「スクールボランティア」として登録されている名古屋大学の研究室に出かけることは多い。専門的で最先端の研究に直接ふれる機会でもある。

ｂフィールドワークでは「生き方」を学ぶ姿勢を

フィールドワークによる体験の意味は何だろうか。どの生徒もフィールドワークを楽しみにしているし何回やっても緊張するという。「知りたいことについていっぱいお話がきけて本当によかった」との言葉が如実に語っているように、フィールドワークを終えた後はどの生徒も顔つきが変わる。その後の学習に対する取り組みが変化する。どのような研究テーマにおいても単なる見学ではなく聞き取りに重点をおき、知識を深めるとともに、お話を聞かせていただいた方の生き方を学ぶ姿勢を大切にしているからである。感謝の心が自然に言葉になる。

ｃフィールドワークの礼状書きは自分の言葉で書く

フィールドワークで得られたもの（知識だけでなく生き方にふれる）を必ず自分の言葉で書くことが、フィールドワーク後の礼状書きで大切にしていることである。自分の認識の変化を自覚する

ことになるからである。そして訪問先の方からの返事（第三者評価）は、次の学習への大きな励ましとなる。

d 保護者や訪問先の方の参加による「フィールドワーク発表会」

「総合人間科」の第一回のオリエンテーションは「保護者会」を兼ねている。毎年どの学年も保護者の方と一緒に「総合人間科」の学習を始める。保護者の方には授業にいつでも参加してくださいと案内している。研究集録（レポート）書きの前に、保護者や訪問先の方にも参加していただいてフィールドワークの「発表会」を行っている。フィールドワークの「報告会・発表会」は、プレゼンテーションの工夫をしたりできる自己表現の場である。みんなからの拍手による励ましと相互評価は楽しい。参加された保護者や訪問先の方からのコメントや感想は生徒の視点と違っている。回数を重ねていくと多様で豊かな学びへとつながっていく。

e 自分の中で総合化すること、実践することへ。

発表会を終え研究集録にまとめたら学習が終わりではない。フィールドワークで多くの人と出会い、学びあったことを自分の中で総合化し発信したり、行動や実践に移したりすることが次の目標になる。そこから学びの真の楽しさにつながる。

【評価】について

ア　総合学習の四つの評価主体

a 自己評価　b 相互評価　c 教師評価　d 第三者による外部評価

イ　四観点からみた総合的能力

総合的能力	中学校評価観点例	高等学校評価観点例
Ⅰ　知的関心の形成と問題解決能力 ・課題決定力 ・課題追求力 ・課題解決力	1 課題に向けての知的関心の形成 2 その中から課題を発見する力 3 課題を追求していく意欲 （自ら調べる力）	1 課題を決定し、探求していく力 2 創造的に問題解決していくための企画力と問題解決能力
Ⅱ　体験コミュニケーション能力 ・体験学習への意欲 ・協働、連帯 ・討論、主張 ・相互認識	1 さまざまな人から学ぶ意欲 2 体験への積極的な参加態度 3 協働、協調、コミュニケーションへの意欲 4 話し合い、討論できる力	1 ディスカッション、ディベートスピーチなどの能力 2 積極的な対話力、討論能力
Ⅲ　創造的表現能力 ・発表能力 ・自己表現力	1 多様な表現能力 （まとめる力と発表能力）	1 問題解決に向けての表現力
Ⅳ　総合的思考力と実践能力 ・行動力 ・社会的態度 ・自らの生活と関わる力	1 課題解決の中での感動、困難の克服、充実感の体験を学校生活に生かしていく態度 2 各教科にかかわる学力を総合的に働かせる意欲	1 学んだことを総合的に働かせる力 2 社会への参加、発言などの行動力 （地域社会への積極的参加） 3 自己と他者を理解し自己実現にむけての実行力 （人生の自覚的選択）

【総合的な学習の時間「総合人間科」にみられる生徒の変化について】

平成７年度から全国に先駆けて本校で取り組む総合的な学習「総合人間科」の学習における生徒の変化には著しいものがある。それは生徒たち一人ひとりの進路選択の重要な契機となり「生き方」を考える進路指導になることである。

このことは大学への進路実績ではＡＯ入試や国公立大学の推薦入試の合格者の増加にも表れているが、一人ひとりの生徒が「生き方」を踏まえた進路観を形成して学部選択をした成果は、大学に入学後に顕著となる。

自分自身の興味関心から出発する個人研究（高１）のテーマや学年テーマとして取り組んだ課題が学部決定の動機になったり、フィールドワークでの出会いが職業決定のきっかけになったりする生徒は多い。ある生徒は「十人の発表を聞くと私の知識は十倍になる」という。また、話し合いや発表での友達のテーマや将来の職業についての考え方や価値観に影響され、自分の「生き方」を決め・学部の選択をしたという場合もある。

総合人間科の様々な人や物との学びあいを土台に、総合的に考え「生き方」について、みんなで学び合う進路別の分科会（高３）でのスピーチやディスカッションを通して、一人一人が自分の進路と進路先の選択にしっかりとした目標が持てるのである。面接や小論文が主となる国公立の推薦入試での合格者が増えているのは、自分の言葉で志望理由をはっきりと述べることができるからである。

教育学部に進学したＡさんは「私は教育問題に深い関心を持ち教育学部に進学しました。「総合人間科」の授業では、いろいろな考えを持つクラスの人達と教育問題を真剣に議論し合いました。しかし大学ではそれが出来ません。教育問題に関心のない教育学部の大学生がいます。話し合いもできません。その人達は何のために大学に進学したのでしょうか」と言う。

また、農学部に進学したＢさんは「大学での勉強は総合人間科でやったことと同じです。テーマを見つけレポートを作成しプレゼンテーションをします。研究は本当に面白いです」と言う。

「総合人間科」の学習は、「目的意識を持って自立した大学生活」への基礎作りであることが分かる。そして総合人間科の学習を通して一人ひとりの生徒の「生き方」を踏まえた進路選択につながることがわかる。

「総合人間科」の授業には教科書がない。生徒自身が各学年のテーマから自分の興味関心にそった課題を自分で発見することから「総合人間科」の学習が始まる。総合人間科の学習の主体は生徒自身。先生は総合学習のコーディネーターでありアドバイザーである。この点が教科の授業との根本的な違いである。

(2) ヒューマンプログラム「ソーシャルライフ」（中学１・２年生 と高校１年生）

ヒューマンプログラムは、教科の学習や総合的な学習「総合人間科」の基礎となるものである。現代の子供たちは人間関係をうまく築けないとか、社会のルールをわきまえていないとよくいわれる。「ソーシャルライフ」の授業は、場面と役割を決めて生徒同士で擬似体験を繰り返す中で、思いやりの心を育て、社会への適応力を高めることをねらいとしたものである。

地域の教育力の低下した現代、対人関係や社会集団との関わりについての教育の場が学校でも必

要とされているからである。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科吉田研究室の援助と指導の下、2000年度は授業を行うのは院生で、サポートに担任団が、補助者に大学の先生が関わって「大学との連携」を生かして授業を進めた。この授業はこれまでの中学の教科ではまったく扱われてこなかったもので、心理学的知見をベースに社会人になるための基礎を形成する新たな授業の試みである。

前年度からの継続で2001年度の中学二年生では，教育発達科学研究科の教官と大学院生による「ソーシャルライフ（人間関係構築スキル)」の授業が発展的に取り組まれた。中学一年生と高校一年生では、その内容をモデルにして、本校の担任と副担任がＴＴで授業をし、ソーシャルライフのカリキュラムと教材を研究し開発した。

中高一貫教育の入口である中学１年生を対象にした「ソーシャルライフ」は隔週土曜日の２時間(110分)。中学二年生と高校一年生は年間10時間程度の授業を実践した。

(3) 「選択プロジェクト」について　（中学２・３年生）

中２・３年の異年齢集団で９教科10講座を開設する。１－２－２－１制の「個性探求期」の時期に合わせて、「広く」「浅く」学ぶ選択教科である。

①講座

国語：SAMAZAMA書き方教室　　数学：数検にチャレンジ

音楽：音楽文化史　　体育：附属発　未来のスポーツ

社会：裁判ウォッチング　　理科：身近な植物に親しもう

美術：目指せデジタルアーティスト　　技術：立体製図と木工

英語：Make Drama and Piay Drama　：English Storytelling

②講座の展開

(a) 二時間連続授業（100分）

(b) 生徒の希望により中２（前期・後期）と中３（前期・後期）で合計４回の選択（同一講座は選択できない）

(c) 通常の教科学習では時間•人数の制約から充分にできない学習内容を教科の視点から教師が学習計画を立案する。

(d) 学外講師とのティームティーチングを積極的に追求

③特色

(a) ９教科からなる幅広い選択講座　　(b) 選択による高い動機付けをともなう学習

(c) 効果的な少人数学習　　(d) 異年齢による学びの共有

(e) 学習者参加型の学習　　(f) 課題追求型の学習

④学習の目標・効果

(a) 学習者の興味関心の掘り起こしと選択による学習への高い動機付け

(b) 浅く、広い学習を通して個を探り、自立と共同の学びをつくる。

(c) 各教科を多面的に追求することにより学習内容を深めたり学習項目の関連に気づいたり新たな観点から学ぶことができる。課題追求.の機会と自己決定の経験をふやすことになる。

(d) 自己の個性を新たな観点から追求する機会が与えられることになり自分の個性を探る経験となる。課題追求.の機会と自己決定の経験をふやすことになる。

(4) 「新教科群」について（高校１・２年生）

「広く」「浅く」学ぶ中学の選択プロジェクトとは違って、１－２－２－１制の「専門基礎期」の時期に合わせて、「狭く」「深く」学ぶ学習である。

教科と教科を結びつけたり、大学の学問領域につながるようなクロスカリキュラムの新教科である。

①講座

高校１年

前期「自然と科学」　　後期　「心と身体の科学」

高校２年

前期　「国際コミュニケーション学」　　後期　「共生と平和の科学」

②講座の展開

(a) １クラスを３人の教官が少人数（10～15人）を複数の講座の選択で指導する。

(b) 高１・２の二年間で四つの領域を半期ずつ受講し順番に学ぶ。２単位履修

(c) 平成13年度の「自然と科学」の担当教科は（理科・数学・社会）。「心と身体の科学」は（体育・理科・英語・名古屋大学保健体育センター助教授）

③特色

(a) 一つのテーマを多角的にみる視点の育成　　(b) 展開グループ間の知の共有

(c) 選択による高い動機付けによる少人数学習　　(d) による多様な視点での教科指導

(e) 学習者参加型の学習　　(f) 大学の教員などの外部講師による知的刺激

④学習の目標・効果

(a) 興味関心のあるグループを選択できるので生徒の主体的学習となり、意欲の高い生徒による深く専門的な学習が可能となる。高校三年生での「個性伸長期」につながる力となる。

(b) 少人数学習により学びの多様性と体験的な学習活動ができ学びの楽しさを実感する。

(c) 名古屋大学などの外部講師による授業は生徒だけでなく教員にとっても知的刺激になり新たな視点や最新の知識を学ぶ機会となる。

(d) グループ間の知の共有と連携により、教科の領域にとらわれない広い視野を育てることができる。

(5) 大学との連携によるさまざまな取り組み

①スクールボランティア制度（平成八年度より）	総合的な学習などの支援
②個別学習アシスト教室（中１・２）（英数）	教育学部大学生による教科学習支援
③よつば相談室	教育学部大学院生によるメンタルフレンド
④高２の１日総合大学（学内外の講師による）	名古屋大学他の各学部による学部紹介
⑤学校祭の分科会講座	生徒主催

4．併設型中高一貫カリキュラムについての評価

(1) 青年期の「キャリア」形成に資する「総合人間科」とヒューマンプログラム

総合的な学習「総合人間科」では、100余名の名古屋大学の研究室の先生方がスクールボランティアとして登録（大学との連携）し生徒一人ひとりの研究に協力するとともに、総合人間科の学習を個別に支援する体制がある。豊かで様々な人々との学びの体験は、中１（入口）の「生き方」から始まり、高３（出口）の「生き方」へとゆっくりと成長するのである。総合的な学習「総合人間科」の学びの成果を、青年期の「キャリア」形成の観点から大きく評価することができる。

「キャリア形成」を従前の進路観や職業観として捉えるのではなく、将来に向けての自己実現を目指す力の育成として捉え、中高を通して全ての教育活動の中で展開されていくべきであると考えるからである。中高６カ年の中で、生徒一人一人が明確な将来像を持てる発展的な「総合的な学習」のもつ意味は大きい。

また、ヒューマンプログラムは、教科の学習や総合的な学習「総合人間科」の基礎となるものである。青年期の心理、発達の面を（生きる力・心と身体の教育として）教育学的見地から捉え直すことができる。

「ソーシャルライフ（人間関係構築スキル）」の授業を通して、自分自身の「心と身体」を客観的に見つめ直し自分を再発見することは、将来における自己実現をめざす力を基礎から育てることになる。

中学二年生では，教育発達科学研究科の吉田教授をはじめとる専門家による「ソーシャルライフ（人間関係構築スキル）」の授業で、心理学の知見をいかし体験的な内容で取り組まれている授業である。生徒の授業への取り組み方と反応は活発であり大変好評である。中学一年生では、その内容をモデルにして本校の担任と副担任がＴＴで授業をしている。教師自身が学ぶ内容は多い。

生徒の多様な価値観を育成するためには、生徒だけではなく教師自身が、青年期にある生徒の心理や発達について学び直し、人間関係などに対する多様な捉え方についての意識改革をするとともに、学ぶことが今後大切となるからである。

(2) 中高の選択（「選択プロジェクト」と「４つの新教科群」）の違いと教科の再編への発展

個性の発達において選択の持つ意味は大きい。中学と高校の選択（「選択プロジェクト」と「４つの新教科群」）の違いは、個性の発達を段階的にとらえているからである。

「１－２－２－１制」の中学２年生と３年生の部分の選択は、少人数異年齢集団による「広く・浅く」を選択の理念とした中学選択教科「選択プロジェクト」である。

また、「１－２－２－１制」の高校1年生と二年生の部分の選択は「狭く・深く」を選択の理念とした４つの新教科群である。（「自然と科学」「心と身体の科学」〔高１〕「国際コミュニケーション学」「共生と平和の科学」〔高２〕）これらは大学への発展を視野に入れた教科統合による新教科群である。それぞれの教科の視点とねらいを生かしながら、教科にらわれない授業を広い視野を持って展開できる。「心と身体の科学」では、名古屋大学の総合保健体育科学センターの山本助教授が半期、継続的な共同授業を展開している。他の授業では継続的に学習できない大きなテーマや社会問題な

ど、最新の知識を学ぶとともに多角的にとりあげ学習することが可能となる。

新　教　科　群	担当教科（平成14年度）
①「自然と科学」	地歴　化学　数学
②「心と体の科学」	保体　英語　理科　総合保健体育科学センター
③「国際コミュニケーション学」	英語　国語　地歴
④「共生と平和の科学」	生物　公民　英語

中学の選択教科「選択プロジェクト」が「9教科」であるのに対して、高校の選択教科「**4つの新教科群**」は、複数教科によるクロスカリキュラムである。1クラス40人を生徒の希望により3展開するので、少人数でより専門的な学習と内容の追求ができる。生徒の感想は「興味深く時間があっという間にすぎてしまう。どの授業も面白い。」と大変好評で、学習意欲は高い。

これら新教科群の学習内容は、既存の教科のあり方に大きな影響を与えるもので、今後の高校における「教科の再編」へと発展していく可能性をもつのである。

5．大学との連携をいかした「中等教育の新しいあり方」へ

少子高齢化が進む成熟社会において学校教育のかかえる諸課題は多い。そのひとつは、中等教育である青年期において、生徒一人ひとりが将来への豊かなセルフイメージを持ちにくくなっていることである。インターネット等によるグローバルな情報化社会が進む一方で、学びの意味を実感するためには、地域や社会にフィールドワークで出かけ、直接人に会い様々な価値観と生き方を学び合うことが大切となる。

今後の社会のあり方を考えると中等教育において、生徒自身が自己発見するとともに豊かなセルフイメージや職業観を獲得することがますます必要となる。その育成のためには、大学との連携をいかして「中等教育の新しいあり方」を研究し実践していくことが重要である。

本校では名古屋大学と同一キャンパス内にあるということで、日常的に中学・高校教育と大学教育との連携の様々なあり方を試み、併設型中高一貫カリキュラムの研究と実践をしてきた。キャリア教育についての研究実践をもとに、総合大学である名古屋大学の各学部との協力による「中・高・大の一貫教育」へと発展させていくことが、今後の課題である。

今後の「中等教育の新しいあり方」として「大学との連携」による一貫教育は、多くの可能性をもつものである。

参考文献

名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要（2001）　第46集　5－44